

---

# 友達より‘チョット’うえ

瑠華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

友達より、チョット、うえ

### 【Zマーク】

N4058D

### 【作者名】

瑠華

### 【あらすじ】

この小説は、綺麗な恋愛系の小説です。

## 友達より、チョット、うえ1

### 主な登場人物

+ 朝吹 千夏 中2 幼なじみの陸のことが好き。しかし、中学卒業するまで生きられるか分からぬ程の重い病気を抱えている。

+ 葉月 陸中2 千夏の幼なじみ。サッカー部。同じクラス。千夏の病気のことは知らない。千夏のことが好き。

+ 平岡 鈴音 中2 千夏の大親友。同じクラス。波と付き合っている。実夏のことが大好き。

+ 宮本 波中2 陸の友達。サッカー部キャプテン。同じクラス。

鈴音と付き合っている。

+ 朝吹 実夏 小1 千夏の妹。千夏のことが大好き。

### ♪プロローグ♪

私は生きる希望を失っていた。

誰にも迷惑をかけたくないと1人になっていた。

・・・でも、それはわたしが逃げていただけ。

あんたが手をさしのべてくれてなかつたら、わたしは今ここにはいない。

「今を楽しく生きてみようとか思わねえのかよ！前を見る！－！」

陸、わたし後悔なんてしてないよ

### 第1話『ともだち』

私の名前は千夏。  
よく、ちなつ、って間違われるけど、わたしには  
‘ちか’のほうが全然あつてるとおもう。

わたしは今、恋をしている。叶わない恋をしている。

そして毎日病気と戦つてゐる。でも、普通に暮らしてゐる。みんなはわ  
たしが病気だつてことを知らない……知られたくない。大丈夫！すぐ

に元気になる！…… そうお母さんは言うけど、本当は知ってる。

もうわたしの命はそんなに長くないってこと…。

だからわたしはもう誰も好きになれない、なっちゃいけない。ともだちもいらない。1人で生きて、1人で死んでやる。

中学2年の夏。

「おはようー鈴音 今日も可愛いよ」

「なに朝から言ってんの！バカ波！」

また朝からやつてるよ。あの2人。

「あつー！千夏だー おはよう！」

「おはよう。なに？ またケンカしてたの？」

わたしと鈴音は大親友だ！！自分で言うのも何だけど…。

「おすー！千夏。ケンカじゃないってー！ オレは鈴音の彼氏だぞ？」

！」

こいつは鈴音の彼氏の… なんて名前だけ？ 確か、 、 、 そう！ 波だ

！ … たぶん。

「そりそり。こいつはこんななんだけど、一応彼氏だから。」

「ふーん。付き合つてもケンカはするけどね～。。。まあいつか

！」

みんなわたしのともだちだー！ いつもみんなでワイワイやつてる。でも、こいつだけはただのともだちじゃない。。。

「おーすー！陸ー！」 「おーーー！ 波。お前朝からテンション高いな…」

こいつ、陸はわたしの幼なじみ。そして私の好きな人。

「おすー！ 千夏。今日も男前だなー」

「なに言つてんだよー！ このサッカーバカ！ー！」

「サッカーバカでけつこつ。」

なんてことない。いつもの会話だ。何でわたしはこんなにも素直になれないのだろう…。

「あつー！ そうだ！ 駅前に新しいカフェができたんだってー！ 今日の放課後、4人で行こうよ。」

「おれらは別にいいけど、サッカー部なぜか今日部活ないし。」

「おれらって、、、勝手に決めんなよ！波！！つか、今日休みなの

聞いてねえぞ。」

「なんだよ！行きたくないのかよ！…！」

「そんなこと言つてねえだろ？！」

この2人はサッカー部だ！波はキャプテンだから休みつてこと知つてたんだろうケド…

「千夏はもちろん行けるよね？」

「ごめん…・今日は用事があるから無理だ。・。3人で行つてきなよ。」

なんたつて、今日は病氣の検査に行かなきゃならない日だからな。。

「なーに言つてんの？？千夏がいなきや意味ないじやん！…！」

「そうだよ！…！」

「また今度4人でいいづざー！…！」

「ごめんね…ほんとにごめん。。。」

「ともだちでしょ？当たり前じやん！…！」

わたしがこんなにいい奴のともだちでいることに誇りを持つていた。

「ありがとう」

わたしたちは教室に向かつた。4人で…みんな最高の友達だ…！

## 友達よつ、チョット、うえ2

### 第2話『決心と本心』

わたしはお母さんと、妹の実夏みかと病院に行つた。

「お姉ちゃん。ダイジョウブ？？どこも痛くない？」

「大丈夫だよ！実夏 もう元気すぎきて困るくらい」

実夏はまだ小学1年生だ。ほんとに素直で可愛い なんて優しい妹なんだ！！

でも、わたしだって姉だ。妹に心配させるわけにはいかない。

「それじゃ行つてくるね。すぐ終わるから、静かに待つてるんだよ。」

「うん お姉ちゃん頑張つて！！」

そう言つてわたしは検診しに治療室へ入つた。

「それじゃ～始めます。」

なんてことない。いつものことだ。もう慣れた…

「いやつつ～やつぱ慣れないと痛い！！」

「あと少しだから我慢して！頑張れ！！」

わたしはこの日が大嫌いだ！苦しくて、辛くて、死にそうだ…

「はい。終わり。落ち着くまで、そこに座つて待つてね。」

やつと終わつた。。。

「お姉ちゃん！終わった？」

実夏が入つてきた。

「うん。終わったよ」「お姉ちゃん、だっこしてー」「ほら、おいで。」

いつも、じうだ。検査が終わると実夏は必ずだっこしてと言つようとになつた。いつからだろつ…

「検査の結果が出ましたよ。」ひかりへびうづめ。

「あつはい！」

実夏には待つてもらい、お母さんとわたしは検査結果をききに向かつた。

「検査結果ですが、だいぶ悪化しますね。はつきり言いますと非常に大変な状態です。

発作の回数が増えるかもしません。そのときはすぐ薬を飲んで下さい。手術をして成功すれば、今まで通りふつうに暮らますが、手術の成功率は… 4%しかないんです。すぐに決めなくてもいいです。今後のことはゆっくり考えてこきあしょ~」

あまりにも悪い状態だと聞いたお母さんは泣いていた。  
わたしは泣かなかつた。泣けなかつた。  
信じ切ることが出来なかつたんだ

家に着いた。わたしはこのときから、もう決めていた。  
友達も好きな人も、なにもかももう関わらないって。。。  
自分にはもう生きていいく希望なんてない。

もうすぐわたしは、みんなの前から居なくなるんだ。  
そう決心したとたん電話が鳴つた。

「千夏ー！陸くんから電話よー。」

(陸？！うそ。電話なんて何年ぶり？すぐ嬉しいー)

「もしもし。千夏です。陸、どうしたの？」

「おーー千夏。今から会えない??」

「えつーじめん・・・ちょっと無理だ...」

「まじでーんじゃ、今言つわー」

「何??」わたしはわざと決心したことを思い出した。

「おれ、ずっと前から千夏のことが好きだつたんだ。オレと付き合つて下さー。」

「えつー！それほんと?」

びっくりした。こきなり陸からそんなことつてくるなんて。。。。

す」く嬉しい！…でも…

「ごめん。わたしはダメだよ…」

「は？ なんでだよ。」

「理由をあなたに言つまび、優しくないよわたしは。あと、もうわたしに関わらないで。」

「なんだよそれ！ 意味わかんねえよ…！」

「べつに分かんなくてもいい。それじゃ。」

ガチャツッ。

でんわを切つた。わたしから…・

本当はこんなこと言いたくなかった。でも、もう一人で生きていくつて決めたから。

わたしはわたしのやり方でみんなを最後まで守るから

## 友達よつ、チョット、うれし

### 第3話『死へのカウントダウン』

私はいつまで生きられるのだろう。いつも私はそれしか考えていないかった…

不安と悲しみで、心がいっぱいだった。  
私は少しずつ死へと向かっている

登校日。学校へ向かう足がとても重く感じた。

「おはようー千夏」

「…………」

「ん? どうしたの? 怖い顔して。」

「………… もひ、私に関わらないで!」

鈴音はびっくりしている。そりやそうだよね。。。

「なんで? どうしていきなりそんなこと言うの?」

「もう、疲れたんだよ! ずっと、あんただちのことウザいとおもつてた。」

私がそう言つた瞬間、鈴音は泣き出した。

「分かつた…そこまで言つなら、もう近づかないよ…」

違う! 違うよ、鈴音! …すぐ、そう言つたかった。

でも、今の私が言えることは…

「分かつたんなら、もう話しかけないで! 波にも言つといて! それじや」

「ごめん。鈴音。」いつもするしかないの。病気のことは知られたくないの。

「ごめんね。」めんね

「ただいま。」

「お帰りなさい おねえちゃん、だっこして…！」

「まだ…。なんで、こんなにも私にだっこしてほしいのだろうか…」

「いいよ！おいで」

「おねえちゃん、どこにも行つたりしないでね。ずっと、実夏のそばにいてね！」

「えつ！私はびっくりした。実夏がこんなに私のことを心配していたなんて、全然知らなかつた」

「…大丈夫！実夏おいでどつかに行つたりしないから…。ほら！泣かないの！」

「…うん。分かった！もう、実夏泣かない。」

「うん。。。さあ、一緒にお風呂入ろっか！」 「うん…！」

改めて、思い知らされる現実

わたしはあと何年生きられるのだろうか。

わたしはあと何日生きられるのだろうか。

わたしはあと何秒生きられるのだろうか

私の、体は確実に、死へのカウントダウンを始めていく…

悩んでいたつて、時間は静かに過ぎてゆく。

・・・私はもうすぐ消えるんだ。

## 友達より、チョット、うえ4

### 第4話『思い出と未来』

雪が降っていた。

私は、今6歳。陸も、もちろん6歳。

私たちは、2人で遊んでいた。雪合戦、雪だるま、楽しい時間。あの、楽しかった冬の日の思い出

「…………うん、、、なんか懐かしい夢見たなあ。」

私は、今、13歳。中学2年生だ。

あの、楽しい時間が私の中で、よみがえる。

そして、同時に突きつけられる現実…

「…陸。会いたいよ…陸

雪が降っていた。あの頃と同じ…

そう、あの日と同じ、今日は2月22日。私の誕生日…

「毎年、陸がプレゼントくれるのになあ～」

冬休みがまだ終わっていないこの日、わたしは誰にも祝つてもられない。

いや、たぶん学校でも、祝つてはもらえないだらう…。私は、血から1人になつたんだから…

「こんなに、寂しい誕生日なんて、生まれて初めてだよ…」

わたしは、1人で泣いていた。ずっと、1人で…

でも、今日から14歳。13歳の自分とは違つ。もう、泣かない。

私は、今日、14歳になった。あと、何日生きられるのだろう。15歳までかな…

「分かんないよ。そんなこと、怖くて考えられないよ…」

ただただ、降り続ける雪を、私は、窓から眺めていた。

家には誰もいなく、私は部屋でアルバムを見ていた。

ピンポーン。

家のチャイムが鳴った。しかし、家のドアを開ける気はせらうがない。

私は、ほつといたらそのうち、居なくなるだらうと思つていた。

…が…！

ピンポン。ピンポン。ピンポン…

どつかの、ガキのいたずらか！あ～うるせえー…！

チャイムが鳴り始めてから、5分。まだ、鳴り続いている。さすがに、キレた私は、仕方なくドアを開けた。

そこにいたのは、あまりにも意外な人で、私はびっくりした。

「…陸。」

「お前なあ～はやく出でこ～よ～オレずっと、外にいたから寒くて…悪い～おじやましま～す～！」

「ちょっと、陸。なんで、あんたがここに留るんだよ～。」

「何でつて…今日、お前の誕生日だろ～もしかして、忘れてた？」

「忘れてるわけないじゃん。そつじゃなくて、何であんたがここにいるのかを聞いてるの…！」

「だから、お前にプレゼント渡しに来たんだよ～いつものことだろ～！」

「…わたしに聞わらないでつて、言つたでしょ～帰つて…！」

言いたくもないのに、つこ出てくる言葉。いや、今はこれしか言えない…

1人で生きて、1人で死ぬつて決めたから

「だから、なんで？いきなり、聞わるなつて言われても…。理由も分かんないのに。」

「それは…お前に言つほどの事じやないつて、言つただろ～。」

「理由を言つ氣になるまで、オレ帰んなからな。」

「はあ？何、それ…帰つてよ…！」

「やだ」

帰つて、やだの繰り返しが家中に響いた。

そういうえば、こんなにも声を出したの、久しぶりだ。

「…わかった。言うよ。わたし、病気なの。すごく重い。いつまで、生きられるか分かんないの！」

わたしは、下を向いたまま、泣いていた…

泣かないって決めたばっかだったのに、だめだな、私は…

「なんだよ、それ！何でずっと黙つてたんだよ！…」

「…」

「逃げんなよ！オレの顔を、見ろ！前を見る！」

陸は、私の顔を上に向け、私の涙を拭いた…

「陸には、知られたくないかった。陸のことが、好きだから…」

「オレも、好きだよ。まだ、お前には未来がある。誰もいなくなつても、オレが居る」

絶対、無理だと思つてた。叶わない恋だと…

私にも、未来があるのかな？

あと、何回、誕生日を迎えるかな…

今はまだ、全然分からぬけど、私は今を大切に生きていくつと思つた。

まだ、私は死んでない。生きてるから

## 友達よつ、チョット、うれし

最終話『明日になれば』

あのあと、鈴音と波ともふつつの仲に戻って、楽しい毎日を送っていた。

私は、今、中学3年生。今は、受験勉強の嵐がわたしを苦しめる…そんな時期だから、逆に頑張れる…！

「おす、千夏。病院ちゃんと行つてきたか？？」

「うん！大丈夫だよ…！」

陸とは、今付き合っている。陸は、わたしのありのままを受け入れてくれた。

「無理すんなよ？お前、いつも笑つてるけど、ほんとは苦しみでるんじゃないかつて…」

「…ちよつとー！わたしをバカにしてんの？ほんとに大丈夫だつて…！」

「…陸がわたしのことを心配するたびに、胸が苦しくなる。

なんで、わたしがこんな思いしなきやならないのだろう…なんで、なんでわたしなのだらう

「そつか…なら、いいんだけど…そんじゃー行ひつか…」

「…うん…じやあ、出発～」

落ち込んでる場合じゃない…今を楽しまなきや

今日は、陸と2人きりで、久しぶりに海に来た。なつかしい空の色、暖かい太陽、海のにおい…昔、ここに陸ときたつけ？

覚えてる。知つている。ここに暖かさ…

「ねえ、陸。昔ここにきたことあつたつけ？」

きょとんとした顔で、陸はわたしを見ている。そして、ため息をついた。

「はあ～お前、忘れてたのかよ…よく遊びに来ただる？」

「うーん…あつ…思い出した…おぼれかけてた私を、陸が助けてくれた海だ~」

「お前…そこから思い出すのかよ…!」

「ええ~別にいいじゃん。今となつてはいい思い出だよ」

「いつ言って、わたしは海までダッシュで駆けぬけた。

「つめたーい。陸もおいでよ~気持ちいいよ…!」

「おい…あぶねーだろ…無理すんなよ…!」

陸が、私の腕をしつかり掴んだ。

…わたしの頬に、一筋の涙がながれた。

「おい、どうした?…どうか、痛いのか?!

「…ない…で…」

「えつ?」

「わたしが今、すぐ幸せなのは…死にたくないくらい幸せなのは…誰のおかげだと思つてんの?…わたしのせいで不安になんかならないで」

静かに流れる涙と、ゆっくり流れる時間…大事な時間…

わたしの病気なんかのせいで、無駄にしないで!不安な時間なんかいらない!!

「ごめん…ほんとに大好きだよ。ずっとずっと、そばにいる。」

気づけば、わたしは陸の腕のなかにおさまっていた。暖かな陸のぬくもり。

「なんでだろ?昔から、陸のとなつはこんなにもホッとする…」

突然、田の前が始まつへりになつた。

「千夏、千夏…千夏…――…」

…陸?

陸がわたしを呼んでいる。ちゃんと、聞こえていてる。

陸!…ここにいるよ…!…陸の声、ちゃんと届いてるよ…!…

「なんでだよ…なんで俺を1人にするなよ…!…田を覚ませよ…」

「なんで?…なんで、陸は泣いてるの?」

お母さんも、お父さんも、実夏も……鈴音も、波も……なんなの?どうなんてんの、これ……!

「お前は、死んだんだよ。今から、わたしと一緒に天国に行くんだ。」

見ると、そこにはおじいさんがいた。

「誰? あなたは誰なの? 私が死んだって……」

「わたしは、お前を天国まで導くもの。見てわかるだらう? みんな、泣いている。」

「そつか、わたし死んじゃったんだ。」

「さあ、行こう。朝吹千夏。」

「待つて!! 最後に、一つだけお願ひしていい?」

「陸と、話がしたい。最後のお別れをいいに……」

おじいさんは、びっくりしていた。

「いいだろう。」

「……病院かな? あそこで、陸が泣いている……」

「陸! !」

「……千夏? ! お前……」

「へへつ、びっくりしたでしょ? わたし死んじゃったんだってね……」

「なんで……」

「だから、最後のお別れを言いに来たの。あのね陸、わたし後悔なんてしてないよ。すく幸せだったんだよ。笑ってる陸が大好きだつたんだよ……だから、泣かないでほしい、ずっと笑つててほしい、幸せになつて欲しい。陸はわたしの分まで、生きるんだよ。」

「……分かつたよ、もう俺泣かないから。」

「ほんとに、ほんとに大好きだよ。ありがと。ばいばい……」

次の瞬間、千夏が消えた。

「千夏……俺、もう泣かないから。だから、見守つてくれよ……」

青い空に、一筋の雲が流れた。

流れ星のように、綺麗に輝きながら

わたしの小さな恋は、永遠に輝き続けるよ。

陸、いつもキミは…

友達より、チョット、うえ…だよ。

ばいばい。

ずっとずっと、ありがとう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4058d/>

---

友達より‘チョット’うえ

2011年1月12日23時35分発行